

『手巾』（芥川龍之介）小考

吉田俊彦

はじめに

『手巾』は大正五年十月、『中央公論』に発表された短編小説である。^{注1}「切れ味の鮮か」とか「驚くべき程度にまで」描かれた「巧みな皮肉」、また、「老巧を極めた」^{注2}点などを評価する好意的な同時代評には、思想的、文化的問題を鋭利に裁断する批評精神と鮮明なイメージ定着への共感を讀みとることが出来る。これに対し、田山花袋は「こういう作の面白味は私にはわからない。何処が面白いのかという気がする」という否定的評価を下しているが、これは、技巧を凝らした作りものを容認しない自然派作家の立場から見ても、当然の結果であつたと言えよう。こうした否定的評価を下した同時代評の中で、最も具体的な問題指摘を行つたのは斬馬生の『十月の文壇』であり、これは、主人公の「性格」「態度」の暗愚な欠点とか形象度にも関わりを持つモチーフの不明瞭性を指摘している。

時代が下り、批評精神と形象性の両面から捉え、一つの明瞭な評価軸を打ち立てたのが、吉田精一氏の論考である。吉田氏は、芥川の「常に完璧をめざす必死の努力と、すこしの投げやりも無駄もない」「精進のあらはれ」として、まず、「正確さ、器用さ」という肯定的特徴を捉え、次いで、「形式が整ひすぎて、ゆとりと内からあふれる力にとほしい」否定的特徴をも指摘され、そして、「手巾」については、「文明批評としてはつつこみ方が足りず、作者自身も問題だけを出して、身をひいてしまつてゐる観があるが、気の利いたまとまりのよい短篇」であると論断されている。この概括的に整理された評価内容は、爾後の『手巾』研究に大きな影響を与えるものとなつたが、作品の主題を「文明批評」であるとされる整

理などには、具体的に検討すべき余地が大きく残されているものと考えられる。磯貝英夫氏は、吉田精一氏の提起された、『手巾』における芥川の批評精神の突込み不足を是認されながら、その主要な原因を三点に纏めておられる。第一が、芥川自身「書簡のなかでも心配しているように、あきらかにそれとわかる現存の人をモデルに使つたために起こる批評精神のありようの問題であり、第二が「問題を鋭利につかんでも、それを論理的に追いつめるたちではない」芥川の資質的問題であり、そして、第三が「一概に封建思想の否定というようなものではなく、価値の多元論、相対主義の立場をとつている」「芥川の基本的な思想上」の問題である。

この小論では、この磯貝氏の三つの問題指摘を手掛りとして、まず第一に、『手巾』の中心的イメージ構想に強い影響を与えたと考えられる森鷗外の『仮面』との共通性と異質性の中に、芥川の批評精神の特徴を探り、次いで、『手巾』と同一素材によつて制作された久米正雄の『母』との比較によつて、芥川の資質的特徴を捉え、そして最後に、『虱』の批評精神に深く関わる『手巾』の作品史的位置と芥川的基本的な形象モチーフを整理してみたい。

一 『手巾』のイメージ構想と『仮面』

森鷗外の『仮面』が発表されたのは、明治四十二年四月一日発行の雑誌『昂』第四号である。そして、明治四十二年六月一日からは、伊井一座により、新富座において上演されている。なお、この作品の収められた戯曲集『我一幕物』が刊行されたのは大正元年八月である。『昂』『我一幕物』の発刊時期および伊井一座による『仮面』の上演時期と『手巾』の執筆時期から見て、芥川が『手巾』の執筆前に『仮面』を読了する機会は、十分に想定できるのである。勿論、『仮面』読了の実証的資料を見出し得ない現時点においては、『仮面』の影響論はどこまでも仮説に過ぎないが、『手巾』のイメージ構想と劇構成には、『仮面』の援用によつてはじめて明確にすることのできる特質があるのであり、ここで、『仮面』と『手巾』との対応関係に注目してみたい。

『仮面』の発端部には、栗の血痰検査の結果を氣遣う金井夫人の心痛が劇要素

として用意されている。それは、血痰検査の結果がどうなるか、肺結核菌が検出されはしないかという緊張感である。この夫人の心痛は、葉自身の抱く血痰検査の結果への危惧と重なり合うものである。葉の「鋭敏な」神経を思いやり、杉村博士から最悪の検査結果を聞かされた時の葉の衝撃を懸念する金井夫人の心遣いは、葉ばかりを頼りにし、葉の音信の途絶えた時など過度の心配を重ねる母親の心根と同様に、日本の家族我によつて結ばれた情愛の現れと言える。これに対し、『手巾』の発端部の劇要素は、ストリントベルクのドラマトウルギイの「警抜な一章を読み了」えては、ヴェランダの「岐阜提灯の方を漫然と一瞥」する長谷川先生の心の動きの中に用意されている。先生は岐阜提灯を漫然と一瞥しながら、「奥さんと岐阜提灯と、さうして、その提灯によつて代表される日本の文明とを思」うのであるが、この思念のもとに働く長谷川先生の批評精神が、日本の文明状況をどう分析し、どういう将来展望へと収斂していくのかという緊張感が、『手巾』発端部の劇要素である。

このように、『仮面』においては、日本的家族我に含まれた甘美な情的和合を背景に、個人の健康状態の危機感を主要な劇軸として据えているのに対し、『手巾』においては、人間的な理解によつて国境を越え結ばれた甘美な夫婦愛を背景に、国家の文明状況の危機感を劇軸に据えているのである。

次いで、展開部における劇要素であるが、『仮面』の場合は、肺結核の病名の記されたカルテの内容を偶然に見てしまった葉が、杉村博士の勇気づけによつて、人間の尊厳な存在性を自覚化していく経緯に用意されている。

△おれの其時が丁度君の今日なのだ。君はおれがそれからどうしたと思ふ。(略)

おれは十七年の間、今日君に言ふまで、誰にも言つた事はないのだ。(緩に。)

おれの沈黙が、いかなるMotivから出てゐるか。それは君の判断に任す。利己主義かも知れない。そんならおれは極めて冷酷な人間だらう。そんならそれを何故君に話すか。話すのは馬鹿なかも知れない。(略)君はNichtschleを讀んだか。／(略)／(略)あの中にも仮面といふことが度々云つてある。善とは家畜の群のやうな人間と去就を同じうする道に過ぎない。それを破らうとするのは悪だ。善悪は問ふべきではない。家畜の群の風俗を離れて、意志を強くして、貴族的に、高尚に、寂しい、高い処に身を置きたいといふのだ。その

高尚な人物は仮面を被つてゐる。仮面を尊敬せねばならない。(傍点引用者)

葉は、己れの結核体験を踏まえて語る杉村博士の熱つばい説得によつて、新たな生への勇気を喚び起すのである。これに対し、『手巾』の展開部における劇要素は、日本の危機的な文明状況を感じ取る長谷川先生が、その救済方向を認識化していく過程に用意されている。

△日本の文明は、最近五十年間に、物質方面では、可成顕著な進歩を示してゐる。が、精神的には、殆ど、これと云ふ程の進歩も認める事が出来ない。否、寧ろ、或意味では、墮落してゐる。では、現代に於ける思想家の急務として、この墮落を救済する途を講ずるのには、どうしたらいいのであらうか。先生は、これを日本固有の武士道による外はないと論断した。(略)それは、独り日本の精神的文明に貢献する所があるばかりではない。延いては、欧米各国民と日本国民との相互の理解を容易にすると云ふ利益がある。或は国際間の平和も、これから促進されると云ふ事があるであらう。(傍点引用者)

墮落した日本の文明状況を救済する途を講ずるには、「日本固有の武士道」による外はないと論断し、さらに、その「武士道」が「欧米各国民と日本国民との相互理解」を容易にするとともに、「国民間の平和」をも促進すると考える長谷川先生は、確信と熱情に支えられた使命感をもつて前進的に生きていることのできる人物である。「奥さんと岐阜提灯と、その提灯によつて代表される日本の文明とが、或調和を保つて、意識に上る」時の長谷川先生の「満足」感、杉村博士の『仮面』の哲学によつて、新たな生の勇気を喚び起した葉の充足感に対応するものである。

「結核」という病気を隠し通した「Motiv」を「利己主義かも知れない」と語る杉村博士に、具体的にどういう意識、感情が働いていたのか、明確にされてはいるが、死の病であつた伝染性の肺結核に対する当時の人々の厳しい反応から推して、利己的な処世知は自然に働いたものと考えられる。吉野俊彦氏は「鷗外は学生の中から肋膜炎にかかり、その後も時々血痰を吐いたが、陸軍省や宮内省を長欠したことはなかつたところからも明らかなように、『仮面』をかぶつたまま、それほど多くの人々には気とれないですませ得る程度には健康を取り戻していたのであらう」(傍点引用者)と推定されているが、これは冷酷な因襲的掟を潜

り抜けて生きようとする処世知を容認された見解と見ることが出来る。

しかし、作品の内部構造に即して読み進む時、「拇指の頭程」の血痰に「心中随分驚」きながらも、「自分の運命は自分で掌握してゐたい」という思いから、血痰検査を己れ自身の手で秘密裡に行う経緯は、葉に語られる「仮面」の哲学と呼応し、別様の「利己主義」が浮び上つてくるのである。それは、「家畜の群の凡俗を離れて、意志を強くして、貴族的に、高尚に、寂しい、高い処に身を置」き、自己の尊厳な存在性を誇り高く保持しようとする武士的美意識と言ひ換えることができよう。幼少時よりすでに發揮していた抜群の才能に寄せる矜恃に加え、藩主龜井侯の御典医まで務めた士族としての誇り高い家柄意識は重要な不遇な生活の中で、一層高貴なものに彫琢されていたと考えられるのであり、葉の新たな生の勇気を支える杉村博士の「仮面」の哲学は、作者鷗外の実生活に深い根を下ろすものであつたと見ることが出来る。

ところで、芥川がこの杉村博士の「仮面」の哲学をどれほど意識していたか、勿論、不明であるが、墮落した日本の文明状況の救済策を認識化していく長谷川先生の造形要素と葉に新たな生の勇気を与える杉村博士の造形要素との間には、明確な対応関係を読みとることが出来るのである。個人的レベルのもとに潜む死の危機感をモチーフとした杉村博士の「仮面」の哲学と公共的(国家的)レベルのもとに潜む墮落の危機感をモチーフとした長谷川先生の「文明」の哲学、自己の内的世界に収斂していく閉ざされた孤高の美学を目指す杉村博士の志向と国際的世界へと拡散していく開かれた共存の政治を目指す長谷川先生の志向、そして、杉村博士の生を己れの原体験に引き寄せて描く鷗外の深い共感と長谷川先生の生を対象化して描く芥川の強い抑制などを挙げる事が出来る。こうした顕著な対照的特徴は、夏目漱石の「夢十夜」(第一夜)の影響下に描いた「死相」とか「尾生の信」^{注10}の形象特徴に共通するものであり、長谷川先生の形象の特徴には、「仮面」の杉村博士の反措定の人物としての特徴が、意外に強く出ていると言えるのではなからうか。

勿論、「屢々アメリカの諸大学に講演し」て、「日米親善に尽」し、そして、「キリスト教信者にして、国際平和を主張し、しかも愛国心強く、その著英文『武士道』は各国語に翻訳され」たという新渡戸稲造^{注11}の人物的特徴は、モデルとなつて

いるだけに、長谷川先生の人物造形に、大きな影響を与えたと見なければならぬ。しかし、長谷川先生の専門分野を「植民政策の研究」と規定し、そして、書齋的知識人としての唐突な分裂的行為を滑稽に重ねる特徴を負わされた長谷川先生の性格的設定は、モデル次元の問題を越えた芥川固有の問題意識が強く関連しているものと考えられる。

アメリカ、ドイツ、イギリス、フランスなどの先進国において、独占資本の形成とともに、その勢力を次第に高めていった植民地獲得論者の声は、様々な論理的美化を行いながらも、その基本には、商品市場や資本輸出の拡大をはじめ、原料の獲得や戦略拠点の確保を目指しながら、利潤の増大化を図る極めて経済的、政治的意図が働いていたと言えるが、これは、富国強兵を目指しながら近代化を急いだ日本の政策動向にも、そのまま見出し得るものである。「植民政策の研究」を専門とする長谷川先生には、日本の近代化政策の宿命的に背負わねばならなかった諸種の矛盾は、当然、見えるはずのものであり、「最近五十年間に、物質的方面では、可成顕著な進歩を示してゐる」が、「精神的には」「墮落してゐる」という日本の文明状況を改革していく方策については、自ら、歴史的構造を踏まえたものでなければならなかつたはずである。ダーウイン^{注12}の進化論を拠り所にして、「適者生存」説とか「白色人種優秀」説の上に収斂した植民地政策の正当性を強弁する植民地獲得論者の政策論法、あるいは、富裕な経済的基盤を足場に、「特有なる細緻な思索力と鋭敏な感性」(「それから」一)を存分に働かせながら、「精神の困憊」(同、六)と「身体の衰弱」(同)と「道徳の敗退」(同)を招いている開化の「暗黒」(同)を裁き、そして、ニル・アドミラリと自己中心の自然的衝迫によつて己れの尊厳な存在性を守ろうとする高等遊民の主張などには、その思想的是非論は別にして、歴史的構造性を踏まえたその時代固有の発想が働いており、それなりの重い意味が認められる。ところが、長谷川先生の文明改革論は、「日本固有の武士道」を唯一の方策とするものであり、この発想は歴史の構造性を逸脱した時代錯誤という外はない。長谷川先生の専門分野が「植民政策の研究」であるだけに、この時代錯誤的な提唱には「唐突の感」が加わるのである。

この唐突さをはじめとし、「植民政策の研究」を専門としながら、ストリント

ベルクのドラマトウルギイを読む唐突さ、ストリントベルクのドラマトウルギイに読書意欲を見せながらも、人気役者、梅幸に不案内な唐突さ、「学者としてのみならず、教育家としても、令名ある先生」だけに、「専門の研究に必要でない本でも、それが何等かの意味で、現代の学生の思想なり、感情なりに、関係のある物は、暇のある限り、必一応は、眼を通して置」こうとする熱意を持ちながらも、ストリントベルクが「簡潔な筆で論評を加へて居る各種の演出法に対し」「先生自身の意見と云ふもの」を全く持たない唐突さ、そして、「日頃から」国際間の「相互の理解」と「平和」の「促進」を目指し、「東西両洋の間に横はる橋梁にならうと思つてゐ」ながら、子息の死を語る母親の前で、子息の死とは「全く独立し」て、口に運ぶ紅茶の処理で煩つたりする唐突さ——これらは長谷川先生の人物的特性を浮び上がらせる大事な要素になつてゐる。

鵬外とは異なり、「对人的に極度に和解的な」下町の精神風土の中に育つた芥川は、特権的知識人としての誇りと見識を持ちながらも、流俗を俯瞰するだけの高逸な伝統的精神基盤を持ち合わせず、結局は、特権的知識人としての自己検証の場を、古今東西の書物の世界に見出していくのである。しかし、芥川は、豊かな読書によつて幅広い知識を獲得しながらも、多様な要素の複雑に交錯する世界の構造性を、有機的な命の総体として捉える視点を育てることができず、ただ膨大な集積的知識の生み出す複眼的観点によつて、芥川は際限のない相対化への道へと駆り立てられていつたものと考えられる。長谷川先生の重ねる唐突さの根本原因は、この有機的な命の総体を捉えようとする視点の欠落にあると言えるのであり、博覧強記をもつて己れを恃む長谷川先生の生の自信と生の不安は、芥川の実生活に深く根を下ろすものであつたと見ることが出来る。

第三は劇展開の山場についてであるが、この場面における「仮面」と「手巾」の中心的イメージは見事な対応を示している。

▲博士。実に気の毒な事をしました。手当が届かない容態で。／みよ。どういたしまして。怪我をいたして亡くなりました。お邸で亡くなりましたので。／みよ。どういたしまして。／みよ。心残りはありません。（拒架を見て、看護婦に。）あれでございますか。／（看護婦頷き、先に立ちて拒架の頭の方へ連れ行き、跪き、毛布を顔丈見ゆるやうに折り返す。みよ跪く。）／どうもお手厚くいたし

て戴きました。／（みよ死骸の顔を暫く見て、襦袢の袖にてそと目を拭く。▲略）みよ毛布を被ひ、静に立つ。看護婦も立つ。みよ博士に。／あの、お邸へ一しよに参つてをりました三太さんに手伝つて貰ひまして、引き取つて参りたうございます。（略）／博士。はあ、さうですか。（紙包を取る。）これは、お上さん、失礼だが、ほんのわたしの志だから、何か仏に供へて下さい。／みよ。（稍猶予ひつ。）さやうでございますか。お断申上げては、却つて失礼でございます。／（受取る。）そんなら戴いて参ります。（帯に挟み、会釈し、戸口へ往きさうにす。▼（傍線引用者）

夫の急死に遭遇しながらも、悲しみの感情に抑制を利かせるこの植木屋の妻、みよの印象的な挙措態度に対応するのは、子供の死を長谷川先生に報告する西山夫人の平静温雅な姿である。

▲——いや、実際、意外でした。／何しろ、手のつくせる丈は、つくした上なのでございますから、あきらめるより外は、ございませんが、それでも、あれまでに致して見ますと、何かにつけて、愚痴が出ていけませんものでございます。／こんな対話を交換してゐる間に、先生は、意外な事実には気がついた。それは、この婦人の態度なり、挙措なりが、少しも自分の息子の死を、語つてゐるらしくないと云ふ事である。□眼には、涙もたまつてゐない。声も平生通りである。その上、口角には、微笑さへ浮んでゐる。（略）／（略）先生は、婦人の手が、はげしく、ふるへてゐるのに気がついた。（略）膝の上の手巾を、両手で裂かないばかりに緊く、握つてゐるのに気がついた。（略）／——いや、御心痛は、私のやうな子供のない者にも、よくわかります。／（略）／——有難うございます。が、今更、何と申ししても、かへらない事でございますから……。／婦人は、心もち頭を下げた。▼（傍線引用者）

傍線部(一)においては、身近な肉親の急死を一つの運命として容認しようとする自制的な落ち着きが、重要な対応要素として抑えられる。「お邸で亡くなりましたのでございますから」と語るみよと「手のつくせる丈は、つくした上なのでございますから」と語る西山夫人の言葉には、共に、癒しがたい悲しみを慰めようとする自制的意識が強く働いている。次いで、傍線部(二)における対応要素は、癒しがたい悲しみの重みが、抑制の力の下で、確かな人格的存在感を持つ生命体と

して息づきはじめていることである。三島由起夫の作品解説の中に、芥川は「無意識のうちに、西山夫人のステレオタイプな人生的演技を一つの静止した形で、「型」の美と認めていた」という指摘が見られるが、作中の長谷川先生にとつて、西山夫人の「型」の美は不可欠の必要条件であり、この場面において、長谷川先生に感銘を与える西山夫人の「女の武士道」は、「礼」という「型」の枠組みの中ではじめて生きる人間的な崇高さと豊かさによつて支えられたものである。「仮面」の杉村博士の眼に映る、植木屋の妻、みよの美しさもこれと同質のものである。「本能的人物には、確に高尚な人物に似た処があるなあ。家畜の群の貴婦人に、あの場合あの位に切り抜けて行けるものは、たんとあるまい」と葉に語る杉村博士の讃辞には、西山夫人の「けなげな振舞」を「日本の女の武士道だ」と賞讃する長谷川先生の言葉が対応していることは言うまでもない。傍線部(三)においては「我々自身の悲哀もしくは苦痛を露すことにより他人の快樂もしくは安静を害せざるよう要求する」「礼」によつて自制を守り通した高雅な人間的余韻が対応要素となつている。

最後は劇展開の結末部についてであるが、ここには、主題に関わる本質的な相違が認められる。「仮面」の結末部における葉が、杉村博士への敬意と信頼を深めながら、自己の存在性を確証するための、高貴な美意識に支えられた精神的高みに落ち着いていくのに対し、「手巾」の結末部における長谷川先生は、ストリントベルクのドラマトウルギイの一節によつて、奥さんと西山夫人と岐阜提灯の三つが「或る倫理的な背景を持つて、先生の意識に浮んで」いた幸福感を乱されそうになるのである。主題は、この長谷川先生の幸福感の乱れをどう解釈するかによつて異なつてくるものと考えられるが、これは、「手巾」と「母」との比較検討によつて捉えられる芥川の資質の問題と合わせて検討してみたい。

二 『母』とは異なる『手巾』の独自性

加藤武雄は、新潮文庫『学生時代』の解説において、「母」は、芥川君の「手巾」と対照せらる可き作で、この対照の裡に、両者の全芸術を比較し得るように思つた」と述べているが、同じ素材のもとに作成された作品であるだけに、作家

的個性は自ら明確に捉えられるのではなからうか。「手巾」が「母」と同一の題材によつて作成された事情については、久米正雄が「鼻」と芥川龍之介」と題する一文の中で、「この『手巾』といふのは、一宮にゐて書いたものですが、元々、あの材料は僕のものだつたのです。新渡戸さんのことを書いたもので、一宮で雑談してゐるうちに、僕がかう云ふものを書かうと思つてゐるといつたら僕にそれをくれないか、中央公論から頼まれて来てゐるんだ」といふ訳で僕が話してやつたものです。(傍点引用者)と述べている。もつとも、題材の同一性については、作品内容の類似性から見ても、十分に推定し得ることである。笠井秋生氏は、新渡戸稲造をモデルにしたと考えられる主人公の名前、主人公に対する作者の皮肉な観察と偶像破壊的志向、生活体験を訓話あるいは講話の材料にしようとする主人公の考えなど、類似性を具体的に摘出され、「武士道」を書き進めている時の芥川の念頭に、久米の「母」が存在していたこと」を推定されている。

ところで、問題は、同一の題材を用いながらも、形象過程に現れる作家的個性の特徴についてである。まず注目しなければならないのは、「母親」の形象性に見られる個性的特徴である。

△「ちようど昨夜から伴が少々発熱を致しまして、今朝も受験は見合したら宜からうと云うのを押し出て参りましたので、ひよいとして試験場で卒倒でもして皆さまに御迷惑でも掛けては何ですから、そんな事があつたら早速私が看護してやろうと思ひまして、葉などを用意して参つた次第なのでございます。……洵にお恥かしい処をお目にとまつて恐れ入ります」／先生はその話をふむふむと点頭して聞きながら教育家の感動を抑え切れなかつた。そして猶もその婦人の話を聞くと、彼女が某と云う海軍中佐の未亡人で、今の息子が十歳の時に夫を失い、それから十幾年と云うものを夫の恩給をたよりに自分の手一つで育て上げたと言ふ事が解つた。その時先生はふと彼女の顔を見上げて、十数年の寡婦生活が刻んだらしい、きかぬ氣を表わす眉間の皺と、頬に漂ひ残した女盛り・潤いのある光沢とを見定めた。(傍点引用者)

この場面において、矢田部先生の受けとめる「婦人」の人物的特徴としては、まず、濃やかな配慮をもつて献身的に子供のために尽す聡明な慈母の温かさを挙げる事ができる。もつとも、今日的な問題意識をもつて見るならば、この母親

の心遣いには、「子どもの一挙手一投足が気がかりで、いちいち過剰に干渉し、子どもの心の中に侵入し、子どもを操縦し、自分の人生を子どもでもって埋めようとする」母親の病理を読みとることもできるのであるが、矢田部先生にとつては、どこまでも、「感動」を喚び起こす聡明な慈母の美しさのみが見えるのである。

しかも、矢田部先生の心底には、校門を入った所で受けとめた「卑しくない緊まり」のある「顔容」の印象と「日本の婦人」のみある一種の道義的联想を伴う、「一種の美」の印象が生きているのであり、この潔癖な気品は聡明な慈母の温かさとの融合し、さらに、「夫の恩給をたよりに自分の手一つで」子供を「育て上げた」健気さと「頬に漂い残した女盛りの潤いのある光沢」も加わり、「婦人」は先生の胸中に理想的な女性像を結ぶのである。とりわけ、「頬に漂い残した女盛りの潤いのある光沢」は、「手巾」の西山夫人には見られない注意すべき特徴である。

これに対し、「手巾」の長谷川先生の心に留まる西山夫人の特徴としては、まず、「自分の息子の死を語りながら、「家常茶飯事を語つてゐる」かのように感情抑制を加えた、「不思議」なまでの健気な举措態度を挙げることが出来る。この健気な西山夫人の姿は、長谷川先生が応接室に入り即座に受けとめた「日本人に特有な、丸顔の、琥珀色の皮膚をした、賢母らしい」印象とテーブルの下で「感情の激動を強ひて抑へ」るために握りしめる西山夫人の「手巾」の震えから受けた「敬虔な心もち」とに支えられながら、長谷川先生の念頭に、「或倫理的な背景」を持った諸文化の調和的理想像を浮び上がらせるのである。とりわけ、「日本の女の武士道」を体現する、感情的抑制の利いた健気な西山夫人の人物的特徴は重要であり、これは、「母」の「婦人」には見られない文化論的視点によつて支えられたものである。

第二の対照的特徴としては、子供の不運に遭遇した母親の心痛に対応する主人公の反応の相違が挙げられる。「母」の主人公、矢田部先生が、潔癖な気品と聡明な温かさとの健気な意地と、そして、漂い残す潤いのある色香を備えた「婦人」の心痛に心を動かされながら、婦人への助力を果たす「実践行為」へと踏み出すのに対し、「手巾」の主人公、長谷川先生は、子供を亡くした心痛を微笑の裏に隠す西山夫人の健気な姿に「日本の女の武士道」を見出しながら、東西両文化を繋ぎ支える倫理の「認識思索」へと向かうのである。この「実践行為」と「認識

思索」の相違は、そのまま、作者の資質的特徴を表わすものであり、矢田部先生の「実践行為」の過程において働く「好奇心」とか長谷川先生の「認識思索」の過程に浮び上がる調和的文化像の「倫理的背景」なども、作者固有の資質に深く根を下ろすものであつたと見てよからう。

久米は、矢田部先生が「婦人」の心痛を救うために「実践行為」へと踏み出す過程において、まず、「婦人」の「十数年の寡婦生活が刻んだらしい、きかぬ気を表わす眉間の皺と、頬に漂い残した女盛りの潤いのある光沢」を先生に「見定め」させ、そしてその後、「婦人」に対する「同情と共に、その子を見て置きたいと云う好奇心」を先生に抱かせている。やがて、受験場において、「婦人」の子息の健康状態を確認しようとする先生には、まず、「母に似た端正な顔立ち」を受けとめさせ、そしてその後、健康状態を確認させている。ここで重要なことは、「婦人」に対する「同情」に併せ、子供に対する「好奇心」を矢田部先生に抱かせていることである。この「好奇心」は、受験場で「母に似た端正な顔立ち」をまず見定める矢田部先生の気持ちと呼応し、「婦人」の「漂い残した女盛りの潤いのある光沢」に対して働く無意識の「好奇心」を、微妙に浮び上がらせるのである。久米は、この無意識の「好奇心」を設定することによつて、はじめ、矢田部先生に対し、批評精神を自由に駆使することができるようになつたと言えるところではなからうか。磯貝英夫氏は、「手巾」の芥川先生を「かなり高いところから見下ろし」「片頬に皮肉な笑いを浮かべて書いている」と評しておられるが、この評語は、むしろ、「母」の矢田部先生を描く久米に当てはめることができるものと言えよう。

▲そうか。じゃあ気をつけてしつかり書き給え。／「はあ」と猶受験生は理由を知らぬ好意の先生の顔にあるものを見守つていた。／先生は何かもつと云いたいと感じた。しかし何も云わないで置くのが猶嬉しいような感じもした。それで再び生徒が筆を取り上げるのを見ると、黙つて教室を出た。只出る時、教室の通風の具合を一応見分して、北の端の窓の上半が開けてないのを見、それを教官に注意することを忘れなかつた。▼(傍点引用者)

「婦人」の子息の健康状態を確認し、激励の言葉を掛けて受験場を出るこの矢田部先生の善意は、その底部に働く無意識の「好奇心」が読者の側に見えている

だけに「どこか偽善の匂いをする大ぶりの挙措」として映るのである。^(注)

これに対し、「手巾」の主人公、長谷川先生の西山夫人に対する反応の仕方は、大きく様子が異なっていると言わなければならない。長谷川先生は、子供の死を明かす西山夫人の自製の利いた挙措態度に接しながら、「日本固有の武士道」の真髓を重い人格的存在として認識化していくのであるが、芥川は、この過程において、まず、長谷川先生の「唐突な」心理を設定している。それは、子供の死を語る母親の前で、子供の死とは「全く独立し」て、口に運ばれた紅茶の処理で煩う心理の設定である。この「唐突な」心理設定は、「母」における矢田部先生の「好奇心」に対応するものである。しかし、この「唐突な」心理の設定には、「母」の久米が矢田部先生の「好奇心」に示したような悪意を読みとることはできない。ここで、長谷川先生の重ねて見せる「唐突さ」に着目してみたい。

▲先生の専門は、植民政策の研究である。従つて読者には、先生がドラマトルギイを読んでみると云ふ事が、聊、唐突の感を与えるかも知れない。が、学者としてのみならず、教育家としても、令名ある先生は、専門の研究に必要でない本でも、それが何等かの意味で、現代の学生の思想なり、感情なりに、関係のある物は、暇のある限り、必一応は、眼を通して置く。(傍点引用者)

「植民政策の研究」という専門分野から遠く離れた「ドラマトルギイ」を読む先生に、「聊、唐突の感」を抱く読者の気持ちを見越し、教育家としての熱心な幅広い読書傾向を説明するこの描写部には、磯貝氏の指摘される「見おろし」描法よりも、むしろ、理解と親愛の情を向ける作者の温かな視線を読みとることができるのである。これは、次の描写部とも密接に照応するものである。

▲先生は、由来、芸術——殊に演劇とは、風馬牛の間柄である。日本の芝居でさへ、この年まで何度と数へる程しか、見た事がない。——嘗て或学生の書いた小説の中に梅幸と云ふ名が、出て来た事がある。流石、博覧強記を以て自負してゐる先生にも、この名ばかりは何の事だかわからない。(傍点引用者)

「太閤記十段目の操を勤めて居る」「帝國劇場の座付俳優」の名前「梅幸」を知らない先生を、「流石、博覧強記を以て自負してゐる先生にも、この名ばかりは何の事だかわからない」と描く芥川は、流俗とは無縁な書齋的知識人の高邁な超俗性を表わしていると見てよからう。そこで、「博覧強記を以て自負している」

書齋的知識人、長谷川先生の、流俗とは無縁な高邁な超俗性と統合的視点を持ち合わせない無邪気な分裂性に対するこの芥川の思い入れは、直後の、批判的な視点の覗きかけている長谷川先生の特徴描写にも、微妙な両義性を生み出す結果を齎している。

▲——だから、先生はストリントベルクが、簡勁な筆で論評を加へて居る各種の演出法に対しても、先生自身の意見と云ふものは、全然ない。唯、それが、先生の留学中、西洋で見た芝居の或るものを聯想させる範囲で、幾分か興味を持つ事が出来るだけである。云はば、中学の英語の教師が、イデオムを探すと、バアナド・シヨウの脚本を読むと、別に大した相違はない。(傍点引用者)

「イデオムを探すと、バアナド・シヨウの脚本を読む」と違わないような読書を行う限り、様々な事象を己れの問題意識に収束させ、そして、世界を有機的な統合体として捉える認識作業は、長谷川先生にとつて不可能なことであるという外はないが、これはそのまま、観念的な純粹理念の実現を直線的に目指す書齋的知識人の狭隘な純粹性と無邪気な分裂性に結びつくものである。ここには「電車さへ通さないと云ふ大学」(三四郎二)の「穴倉の下」(同)で、「生涯現実生活と接触する気がない」(同)ように研究を続ける野々宮とかフロツクコート姿にチヨン鬚を結い、そして鉄扇を持つ迷亭の伯父の「時候おくれ」(吾輩は猫である)九)などに温かな理解を示す夏目漱石と同質の思い入れをもつて、停車場に立つ能勢の父親を描いた「父」の視線がそのまま生きているのであり、矢田部先生の「実践行為」と「好奇心」と「偽善の匂い」に対応する長谷川先生の特徴としては、「認識思索」と「唐突さ」と「無邪気な熱情」を挙げることが出来る。「日本の女の武士道」を体現する西山夫人によつて照らし出される長谷川先生の無邪気な純粹性は、「母」の矢田部先生には見られない重要な人物特徴である。

第三の対照的特徴は、結末部における作者の批判姿勢の相違である。「母」の久米は、彼自身、「自分」として作中に直接顔を覗かせながら、矢田部先生が感動して助力を惜しまなかつた「婦人」の批判を、「自分」の母親によつて行わされている。そして、「婦人」の価値低落とともに、矢田部先生の「どこか偽善の匂

いのする大ぶりの拳措」が、読後感に浮び出て来ることを狙っている。これに対し、「手巾」の芥川は、直接作中に顔を覗かせることはなく、そして、長谷川先生の心に抱く「平穏な調和」体を破ろうとする「ストリントベルクの指弾した演出法」の暗示には、「日本の女の武士道」を体現する西山夫人の価値低落には直結したい複雑な抑制を働かせ、長谷川先生の純一無邪気な浪漫性と得体の知らない不安が、読後感に浮び上がって来ることを狙っている。

▲先生は、本を膝の上に置いた。開いたまま置いたので、西山篤子と云ふ名刺が、まだ頁のまん中にのつてゐる。が、先生の心にあるものは、もうあの婦人ではない。さうかと云つて、奥さんでもなければ日本の文明でもない。それらの平穏な調和を破らうとする、得体の知れない何物かである。ストリントベルクの指弾した演出法と、実践道德上の問題とは、勿論ちがふ。が、ストリントベルクからうけとつた暗示の中には、先生の、湯上りののんびりした心もちを、擾さうとする何物かがある。武士道と、さうしてその型と——先生は、不快さうに二三度頭を振つて、それから又上眼を使ひながら、ちつと、秋草を描いた岐阜提灯の明い灯を眺め始めた。……(傍線引用者)

傍線部(一)が「栞代りに」「本の間へはさんで」いた名刺の様子を表わすものであることは言うまでもないが、同時に、これは、ハイベルク夫人の二重の演技に対するストリントベルクの指弾を読んだ後、西山夫人の姿が長谷川先生の心から消え去つた傍線部(二)の状態を強調的に表わすための補助的役割を持つものである。勿論、芥川は、長谷川先生の心から西山夫人の姿を消すことによつて、西山夫人の「けなげな振舞」に価値観の変動が生じることを狙っているのである。しかし芥川は、「母」の久米のように、作中に直接顔を覗かせて、西山夫人の「けなげな振舞」に批判を加えることはなく、むしろ、ハイベルク夫人の二重の演技に対するストリントベルクの指弾が、西山夫人の「けなげな振舞」に対する批判に直結することを、傍線部(四)において抑止するのである。それでいてまた、傍線部(三)と(五)に描き出されているように、ストリントベルクの指弾内容がある「暗示」を長谷川先生に与え、そして、その「暗示」によつて、「湯上りののんびりとした心もち」の中で保つていた西山夫人と奥さんと日本の文明との「平穏な調和」を破損しようとするのである。この複雑な抑止と暗示によつて、長谷川先生

の内的葛藤を表現する傍線部(六)の「武士道とさうしてその型と——」という言葉には、不明瞭な意味内容が生じている。

笠井秋生氏は、「武士道とその型」の問題に、自分の心を擾す何物かがひそんでいと気付いただけで、その何物かの正体を見定めようとはしていない。長谷川先生の内的状況を、この傍線部(六)に読みとつておられるが、確かにここには、長谷川先生の明確な認識志向を見出すことはできない。これは、「——」の記号を用いながら、長谷川先生の認識方向を曖昧にした余情表現が、複雑な抑止と暗示とこれまでの形象過程において具象化された、書齋的知識人、長谷川先生の統合的視点を欠いた狭隘な純粋性と無邪気な分裂性と、そして、「日本の女の武士道」を体現した西山夫人の重い存在性と呼应し、長谷川先生の、認識志向を持たない漠とした不安を定着化しているからに外ならない。傍線部(七)の「不快さうに二三度頭を振」う長谷川先生の姿には、為すすべもなく陥る長谷川先生の不快な苛立ちが覗いており、また、傍線部(八)の「秋草を描いた岐阜提灯の明い灯」を眺める長谷川先生の姿には、不安の元凶から身を躲していく長谷川先生の無力な消極性を読みとることができる。観念的な純粋理念の実現を直線的に目指す書齋的知識人、長谷川先生の無邪気な浪漫志向が行きづまり、止揚を図る認識志向も状況変革を探る行動志向も持てないままに、調和的文明論の発表前に後戻りしなければならなかつた長谷川先生の破綻的な生の結末部には、高邁な書齋的知識人の意外に脆弱な生の限界が、笑殺しきれない生の哀感として具象化されているのである。

「母」の結末部とは異なり、複雑な抑止と暗示によつて、長谷川先生の内的葛藤とその認識方向を、漠とした余情の中に溶解させた芥川は、ハイベルク夫人の二重の演技に対するストリントベルクの指弾が、西山夫人の「けなげな振舞」に向ける批判に直結して起こる皮肉な冷笑を抑えることができたのであるが、長谷川先生がそれまで確信していた、「或倫理的な背景を持つ」東西文化の「平穏な調和」体は、大きく動揺しはじめていたのであり、この動揺によつて、書齋的知識人、長谷川先生の生の破綻が生じる限り、「日本の女の武士道」を体現する西山夫人の「けなげな」美德の価値低落も、当然、避けられないのである。余情的表現は、この連鎖的なからくりを漠とした不安に凝縮させながら、巧まざる長谷川先生の生の哀感を浮び上がらせていると見てよからう。ここには、磯貝英夫氏

の指摘に見られるような「一概に封建思想の否定というようなものではなく、価値の多元論、相對主義の立場をと」る芥川の認識姿勢が現われており、この結末部における芥川は、執筆当初の偶像破壊のモチーフに制御を加えながら、長谷川先生の生の不安と哀感に、意外に強い同情を寄せていたのではなからうか。

むすび

莫大な外債、貿易入超を余儀なくしている日本の国際競争力、植民地の拡大を狙う対外政策、農民、労働者の貧困、あるいは、近代的自我の未成熟、これら様々の混迷が複雑に輻輳する外発的近代化の歪みを、日本固有の武士道精神によつて一元的に解決していくことは至難のわざである。武士道精神とキリスト教精神の一致点を見出し、武士道精神を、墮落した「日本の精神文明」の救済と東西両国間の「相互理解」と、そして「国際間の平和」促進の力にしようとする長谷川先生の考えは、現実の複雑怪奇な具体的問題から遊離した、観念的理想論と言わざるを得ない。この観念的理想論の核をなす「武士道」への批判モチーフは、すでに、「虱」の中に見出すことのできるものである。武士道の尊大振つた形式主義の欺瞞性を、「虱とり」という卑俗低次な日常性に忙殺される加州家の侍の滑稽な醜態の中に暴露していくのである。「孝経」の精神を支えに、「身体を、虱如きに食はせる」(「虱」三) 非を宥める井上典蔵の高邁な道德主義とか「たとひ恩を着ぬにせよ、妄に生類の命を断つなどは、言語道断」(同) という森権之進の人倫主張は、その主義主張の抱え込む「虱」という卑俗低次なものとのコントラストによつて、大きな価値低落を起し、作者の批評精神は小気味よい滑稽諷刺として定着している。

久米正雄から示唆を受け、新渡戸稲造をモデルに、古い時代の倫理観を固守しながら空虚な形式主義に生きる偽善人間を裁こうとした芥川は、新渡戸稲造の著書「武士道」の倫理観を中核に据え、「虱」においてすでに試みていた、滑稽諷刺の批評精神による形象法を企図したものと考えられる。しかし、博覧強記の造形作家、芥川は、「母」の久米とは異なり、イメージ形象に綿密細緻な工夫を凝らしながら森鷗外の「仮面」の形象要素を導入し、そしてその形象化の過程に

において、単なる偶像破壊のモチーフによつては処理しきれない、新たな問題に遭遇したと言えらるるのではなからうか。それは、「仮面」の哲学をもつて、己れの尊厳な存在性を高く守りつづける杉村博士の生の姿勢である。この博士の生の姿勢には、芥川の裁かなければならない「素読世代」の形式主義と堅牢な精神基盤を持たないままに相対化を重ねる芥川自身の観念主義の問題が重なり合つて見えるのであり、書齋的知識人の抱え持つ現実遊離の虚妄性と観念的思考の形骸化と、そして、それに伴う存在不安は、新たなモチーフとして大きく育ちはじめたものと考えられる。「母」の主人公、矢田部先生とは異なり、「実践行動」を持たない「手巾」の主人公、長谷川先生の「認識思索」は、このモチーフと密接な関わりを持つた人物特性と見てよからう。

杉村博士の「仮面」の哲学と向い合う思念の中で、重い威圧感を示す「素読世代」の形式主義の問題と芥川自身の抱え持つ書齋的知識人の観念主義の問題とが交錯しはじめる時、偶像破壊のモチーフは複雑に変容し、同じ素材を分ち合つた「母」の久米とは異なる芥川自身のモチーフが強く働きはじめたと言つてよからう。複雑な抑止と暗示によつて、長谷川先生の得体の知れない不安と生の哀感を漠とした余情として定着させる芥川は、皮肉な冷笑を抑止しながら、「認識思索」と「唐突さ」と「無邪気な熱情」を特徴とした書齋的知識人、長谷川先生の生の限界性を暗示することができたのであり、ここには、中心主題として、理念の認識思索に耽る書齋的知識人の不毛な観念性と統合的な思考と行動を欠いた存在不安と哀感を読みとることが出来る。

高邁毅然とした書齋的知識人の狭隘な純粋性と無邪気な分裂性は、自ら滑稽な限界を露呈するのであるが、反俗的、超俗的価値を認める日本の知識人階層の伝統を、この狭隘な純粋性と無邪気な分裂性によつて体現する長谷川先生の人間的存在感は、大正知識人の芥川には、まだ裁ききれない価値対象であつたのであり、「虱」の小気味よい諷刺精神を抑止した「手巾」の形象要因は、ここに認められるのではなからうか。文明批評の意図を認められながらも「批判」とは程遠い「親しみある作者の心情」を「手巾」に読みとられる平岡敏夫氏の指摘は、重い意味があるものと考えられる。

「手巾」において、芥川の批評精神を潜り抜けるもう一つの価値対象は、「日

本の女の武士道」を体现する西山夫人の「けなげな」精神性である。「日本の伝統や風土に根ざした、重量感をもって生き」るこの西山夫人の確固とした人間的存在感、やはり、芥川にとつては裁ききることのできないものであり、これは、芥川の新たな認識志向を生み出す大きな力になつていつたものと考えられる。『地獄変』『奉教人の死』などの主人公に見られる苦渋に満ちた生の美しさと、『煙草と悪魔』『神々の微笑』などの作品世界に広がる文化的風土の問題は、この西山夫人の人間的存在感の認識線上に捉えることのできるものと言えるのではなからうか。

〈注〉

- (1) 江口漢『芥川君の作品』(一九一七、六、三〇、東京日日新聞)
- (2) 十束浪人『十月の雑誌』(一九一六、一〇、一〇、東京日日新聞)
- (3) 赤木桁平『十月の創作』(一九一六、一〇、一〇、読売新聞)
- (4) 帝国文学22巻11号(一九一六、一一、一、雑誌集成「芥川龍之介像」一二〇〇頁所収)
- (5) 『芥川龍之介の芸術と生涯』(一九五二、一〇、河出書房、九五頁〜九八頁)
- (6) 『作品論「手巾」』(一九七二、一一、国文学、学燈社、七八頁)
- (7) 南博氏は「日本人の場合、集団我は最も典型的なもので、家族集団のなかで、深い心理関係に結ばれる成員たちが共通に分けもつ家族我を生み出す」と論じておられる。(『日本の自我』一九八三、九、岩波書店、二六頁)
- (8) 『続森鷗外私論』(一九七四、九、毎日新聞社、一三三六頁)
- (9) ドイツ留学から帰国後の啓蒙論争によつて招いた直属上官らの不信任感、近衛師団軍医部長から小倉の第十二師団軍医部長への左遷、小倉より帰京後の不本意な文筆活動、東京大学医学部の同期生、小池正直よりも九年以上も遅れた陸軍省医務局長への着任など。
- (10) 拙稿『父』(芥川龍之介)小考——漱石の影響——(一九八三、七、岡山県立短期大学紀要第二十七号、四頁〜八頁)
- (11) 『日本人名大事典第五卷』(一九七九、七、平凡社、四七頁)
- (12) R・ホフスタッター『アメリカの社会進化思想』(一九七三、三、研究社、後藤昭次訳、二〇六頁)

- (13) 中村真一郎『芥川・堀・立原の文学と生』(一九八〇、三、新潮社、一〇頁)
- (14) 『芥川龍之介「南京の基督」解説——角川版——』(一九五七、九、新潮社、△『現代小説は古典たり得るか』九五頁〜九六頁所収)
- (15) 新渡戸稲造『武士道』(一九八三、五、岩波書店、矢内原忠雄訳、九二頁)
- (16) 久米正雄『二階堂放談』(一九七五、一一、新潮社、二六一頁)
- (17) 久米正雄『二階堂放談』(一九三五、一一、新英社、三三三頁)
- (18) 『芥川龍之介「手巾」について——岩森亀一氏所蔵の「武士道」と比較しつゝ——』(一九八三、一〇、日本近代文学、日本近代文学会、五九頁)
- (19) 成田善弘『母親の病理——母子関係における依存と自立』(一九八四、一〇、有斐閣、△『母親の深層』一八九頁所収)
- (20) 注(6) 論文、七四頁
- (21) 注(6) 論文、七五頁
- (22) 注(18) 論文、六五頁
- (23) 注(6) 論文、七八頁
- (24) 唐木順三氏は、鷗外、漱石などを「素読世代」と呼び、この世代の特徴を「どこかに四書五経的な骨格をもつてゐた。儒教的、武士的な、凡そ卑屈を嫌ふ高潔なものをもつてゐた。たとへそれが四書五経とは全く反対な表現をとつてゐたにしても。」と規定されている。(『現代史への試み——型と個性と実存——』唐木順三全集第三卷、一九六七、八、筑摩書房、一〇六頁)
- (25) 海老井英次氏は「あまりに無性格すぎる」「新渡戸の理想的なコスモポリタニズム」に向ける芥川の批評精神に、「或倫理的な背景」を持つた「△調和」などを、東と西との間に幻想することがすでに出来なくなつていた若い大正の精神」を読みとつておられる。(『鑑賞日本現代文学』「芥川龍之介」一九八一、七、角川書店、七八頁)
- (26) 『編年史。芥川龍之介(大正五年)』(一九六八、一一、国文学、学燈社、六四頁)
- (27) 石割透『芥川龍之介——初期作品の展開——』(一九八五、二、有精堂、一三一頁) (昭和60年3月29日受理)